

日交研シリーズ A-797

平成 31 年度自主研究プロジェクト

「新しい道路交通システムに対する社会的受容の定量・定性的把握」

刊行：2021 年 1 月

新しい道路交通システムに対する社会的受容の定量・定性的把握

Quantitative and Qualitative study on social acceptance of new transport systems

主査：谷口 綾子 (筑波大学)
Taniguchi Ayako

要 旨

自動運転システム (Autonomous Vehicles: 以下 AVs) の社会的実装が現実味を帯びてきた現在、技術的な課題のみならず、法律等の社会制度や人々の社会的受容性についても関心が高まっている。KPMG コンサルティングの自動運転 Readiness index (2018) によると、我が国は 20 カ国中 11 位と出遅れており、特に政策や法制度 (12 位)、消費者受容 (社会的受容、16 位) が低評価となっている。

本研究では、新しい道路交通システムの社会的受容性を「環境・経済面の費用対効果、人々の賛否意識、期待や不安など様々な要素から浮かび上がる、時々刻々と変化し得る集団意識」のようなものであると捉えることとし、心理学を援用しつつ以下のリサーチ・クエスチョンを明らかにすべく計量分析を行った。

- (1 章) 周辺歩行者の存在による移動制約が、歩行者のパーソナル・モビリティに対する主観的危険度と与える影響は如何なるものか? : VR 実験にて評価し、危険度評価指標を提案
- (2 章) AVs 実証実験における手動介入 (インシデント対応) は、実験モニターの AVs 賛否意識や信頼にどのような影響を及ぼすか? : 国交省道の駅自動走行実証実験データにより検証
- (3 章) AVs に対する市民の賛否意識やその規定因は日本・英国・ドイツでどのように異なるか? : 日英独市民へのアンケート調査より賛否意識とクルマ運転動機に着目して検証
- (4 章) AVs 実験車両の事故報道が人々の AVs 賛否意識に及ぼす影響は? : 米国で起きた歩行者死亡事故報道がドイツ市民に与えた影響を検証

さらに、過去に「新しい道路交通システム」であった自動車が社会に受け入れられてきた経緯を、新聞報道と TV 番組の質的分析を通じて、AVs の社会的実装の道筋を探る一助とするため、以下のリサーチ・クエスチョンを明らかにすべく質的研究を行った。

- (5 章) 自動車の導入初期から戦前までの社会的位置づけの変遷はどのようなものか? : 子どもに着目して 1800 年代末～戦前の新聞記事検索により質的分析を実施
- (6 章) 日本でモータリゼーションが起きた高度経済成長期、交通事故を巡る論点はどのようなものが存在したか? : NHK 映像アーカイブスの番組の質的分析により当時の状況と現代に続く社会的課題、ならびに AVs 導入への課題を明示

本研究では、これらの定量的・定性的分析による AVs の社会的受容の一端を明らかにした。

キーワード：自動運転システム、社会的受容、新技術、CASE

Keywords: Autonomous Vehicles, Social Acceptance, New Mobility Technology, CASE, Quantitative and Qualitative Analysis